第3種郵便物認可
朝日新

## 「このまま街を死なせてたまるか」

# 廃虚の港町に仮店舗

### 南三陸の三浦さん 包丁掘り出し再開へ

南三陸町の港町で、一人の鮮魚店主が「営業再開」に立ち上がった。店舗は鉄骨だけを残し、すべて流された。「このまま街を死なせてたまるか」と再開一番乗りを目指す。

「さかなのみうら」。激しい空襲を受けたような廃虚が連なる志津川港かいわいに先月下旬、手作りの看板が掲げられた。

社長の三浦保志さん(56)が手にあかぎれを作りながら積もった泥をシャベルですくっていた。丸一日かけ、刺し身包丁2本、柳刃包丁2本を掘り出した。

戦前に祖父が創業した鮮魚店の3代目。高校卒業後に上京し、築地の水産会社に就職した。首都圏の百貨店やスーパーの鮮魚売り場に立ち、32歳で後継ぎのためにUターン。ノウハウを生かし、鮮魚を格安で対面販売したところ「行列ができる魚屋」になった。

津波は、その努力をすべて押し流した。

震災の翌日、避難した高台から、がれきを越えながら約3キロを5時間かけて店にたどり着いた。変わり果てた店の屋根に大きな浮きと網が巻き付いていた。「ため息しか出なかった」

家族は無事だったが、自宅を失った。それでも、すぐに店の再開を決意したのは、あれほど威勢がよかった漁師たちが落胆する姿を目の当たりにしたからだ。

骨組みだけが残った鮮魚店の前で片づけをする三浦保志さん。見舞いに来た人にも分かるように手作りの看板を掲げた＝南三陸町志津川越、越田省吾撮影

「船も網も流された。たとえ、もう一度漁ができても、魚を売る場所もない」「もう海を見たくない」という声も耳にした。

「漁業が消えれば、本当に街が死ぬ」。まず自分が動こうと心に決めた。

津波にさらわれた店は75ぢも地盤沈下。防潮堤も切れたままだ。妻はまこさん(54)は「再開するなら高台に」というが、三浦さんは港に近い店舗跡にこだわる。「津波が来れば、また身一つで逃げればいい」

津波に耐えた鉄骨の周りにテントを張り、仮店舗を作る。がれきの街に電柱が建てられ始め、近く開店する見通しが立った。当面は仙台市などから魚を取り寄せる。「誰かが立ち上がらないと始まらない。復興は、ただ待つだけでは来ないのです」

（武田肇）

## 仙台→秋田・大館へ

# 「里帰り出産」無事

### 青葉区の石田さん

次女の千明ちゃんを抱くさん＝秋田県の大館市立

東日本大震災の後、出産のため故郷の秋田県大館市に身を寄せた仙台市の女性が先月、無事に次女を出産した。震災後に病院が受け入れを始めた「里帰り出産」では初めてだ。

この女性は、仙台市青葉区に住む介護支援専門員の石田千春さん(30)。出産予定は3月28日だったが、かかりつけの産科医院が震災その日のうちに、夫旭さん(31)の運転で実家がある大館市に向かった。ガソリンが心配だったが、実家からも親が車で迎えに行き、旭さんと横手市でバトンタッチ。8時間かけてたどり着いた。

千春さんは、入院した18日に体重2970グラムの女児を出産した。命名は「千明」。母子ともに健康だ。旭さんは出産から2日後、病院で千明ちゃんとの対面ちゃんと話してあげたい。思いやりのある子どもに育ってほしい」と話した。

大館市立総合病院によると、震災以降、秋田県外で被災した大館市出身の妊婦から「出産できないか」との問い合わせが相次いだ。病院は3月15日に里帰り出産の受け入れを表明。被災地の宮城県、岩手県、福島県から里帰りした多くの妊婦が、予約も含めて受診している。

（江川慎太郎）

# 県内避難所の皆さ

（判明分、

津波で大きな被害を受けに咲いた桜＝宮城県、水

県内の避難所に避難していることが分かった方々を

順次、掲載して
難時点の名簿を
り、現在はいな
あります。避難
鎖されている場
す。重複してい
ります。ご了承
れまでの掲載分
コム（http://
hi.com/）で。

【気仙沼市・階
小岩悟▽小岩タ
明▽小岩美枝子▽
島勝美▽小島沙絵
後藤宗範▽後藤佑
▽小林あけみ▽小
夫▽小松郁子▽小
産▽小松恭子▽小
順子▽小松翔希▽
松勉▽小松智香▽
松典子▽小松春美
小松仁▽小松真▽
松美千代▽小松優
▽近藤一子▽近藤
い子▽近藤賢太▽
藤富昭▽近藤富恵
▽近藤美穂▽近藤
米子▽紺野かつえ
今野優希▽紺野さ